



三十年代ホルクハイマーの思想の再検討

上野, 成利

(Citation)

社会思想史研究, 17:107-112

(Issue Date)

1993-09-30

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001169>



自由論題

6

三〇年代ホルクハイマーの
思想の再検討

〔報告〕 上野 成利

一 はじめに

周知のようにホルクハイマーは、三〇年代には社会研究所の所長として学際的社會研究のプロジェクトを推し進め、また四〇年代には、アドルノとの共同作業をつうじて、啓蒙のプロセスが新たな野蠻へと顛落してゆく事態を「啓蒙の自己崩壊」と位置づけ、啓蒙の理性に対してラディカルな批判を展開していた。しかし、だからといってホルクハイマーの思想を、もっぱら三〇年代の「学際的唯物論」と四〇年代の「啓蒙の弁証法」(一九四七年)との対比のなかで捉え、「啓蒙の弁証法」をホルクハイマーよりもむしろアドルノの主導のもとで構想されたと見做すのだとしたら、ホルクハイマー理解としても『啓蒙の弁証法』理解としても粗雑の誇りを免れないであろう。『啓蒙の弁証法』以前のホルクハイマーの思想の歩みを内在的に追跡してみ

るならば、「ホルクハイマーは自分自身、衝動に突き動かされてアドルノとの共同作業に向かうような発展を獲得したのだ」(ハーバーマス)という見方にも一定の妥当性が与えられようように思われるからである。このような視座から本報告は、三〇年代の批判理論を一括りにするような一般的了解をひとまず括弧に括り、三〇年代初頭から四〇年代にかけてのホルクハイマーの思想の軌跡をもう一度跡づけることを試みる。また、それによって、『啓蒙の弁証法』における「啓蒙の救出」という主題が三〇年代以来のホルクハイマーの思想の延長線上にあることをも示したい。

* なおホルクハイマーの著作からの引用は、Max Horkheimer *Gesammelte Schriften*, Fischer Verlag, 1988 ff. による、GS 6 略号で示し、巻数をローマ数字で示す。

二 ホルクハイマーの思想的出発点

——近代の「意味喪失」の克服と哲学の解体

ホルクハイマーの根本モティーフについては、アドルノのそれと対比させて考えるとわかりやすいであろう。アドルノの認識論の立場の核心は「哲学のアクチュアリティ」(一九三一年)に端的に看取することができるが、ここに流れている基調音は、〈全体性〉(Totalität)概念に対する徹底的な拒絶と、自律的な理性ないし主観性に定位する形而上学的立場に対する批判である。アドルノは、〈全体性〉を志向する形而上学的な問いが無効となった事態のただなかで、なお哲学に定位しながらそのアクチュ

アリティを問うてゆくことを自らの課題とした。こうして要請されたのが〈解釈 Deutung〉としての哲学であるいは〈発見術 *ars inveniendi*〉としての哲学であった。あらゆる存在者が破片 (Trümmer) と断片 (Bruchstücke) として現れる歴史のなかでいわば暗号 (Chiffre) として残されている現実を解説してゆくのが哲学の営みとされるのである (『自然史の理念』一九三二年、参照)。

これに対してホルクハイマーにとっては哲学それ自体にはもはやアクチュアリティはない。それは逆説的ではあるが、彼が哲学の課題を生の意味喪失の克服、なんらかの形で〈全体性〉の認識のうちに求めていたからだといえる。ホルクハイマーは、脱呪術化の帰結としての生の意味喪失状況を前にして、この状況を全く顧慮しない実証主義的な学のありかたを批判しながら、他方において、生の全体性を主体の体験や直観をつうじて一挙に回復しようとするロマン主義的な思维や疑似宗教的な世界像を新たに定立するような存在論的思维を批判する。ホルクハイマーが掲げたのは〈ロマン主義や存在論的思维によらずに生の意味喪失をいかにして克服するか〉という問いであった。だが、脱呪術化が徹底的に進展した近代においてもはや伝統的な形而上学が存立しえないのだとすれば、このような要請を果たす力は哲学それ自体のうちにはもはや存在しない。むしろ経験科学の力を借りることによってのみかろうじて哲学はこの課題を負うことが可能となる、とされる。

ここには〈学際的唯物論〉の構想の根底に潜む哲学的な問題

意識、〈全体性〉への志向が看取されうるが、このとき〈全体性〉の認識が無条件に目指されていたわけではない。ホルクハイマーによれば、認識対象たる社会的・歴史的現実が認識主観たる人間の構成物である一方、同時に認識主観の認識作用もまた社会的・歴史的現実の側に規定される。換言すれば、「対象」と「認識」、「生」と「知」との間には「止揚したい緊張」(G. III, S. 122) が存在する。ホルクハイマーはこの緊張を安易に止揚し全体的な認識を獲得しようと僭称する立場を却け、むしろこの緊張のうちに徹頭徹尾踏みとどまろうとする。

だが、このようなラディカルなコンテクスチュアリズムは、なんらの形で〈全体性〉を認識し、生の意味喪失を克服しようとするホルクハイマーの哲学的な意図とは、必ずしも相容れないであろう。コンテクスチュアリズムを徹底させることは、真理を完全に相対化することにつながりかねない。価値相対主義を前提とした場合に行為の規範に関して残された選択肢は、「神々の闘争」状況を克服不可能な運命として甘受するか、あるいはこの状況を主体の実存論的な「決断」によって突破するしかないだろう。だがホルクハイマーはいずれの選択肢も拒否する。こうした立場は主体が社会的・歴史的な世界にすでに投げ込まれているという事実を二次的なことと見做し、社会的な生の諸連関をいわば非本来的な次元へと貶めてしまうからである (cf. *ibid.*, S. 48 ff.)。

ここでホルクハイマーはヘーゲル弁証法における「限定された否定の概念」(*ibid.*, S. 285) に着目する。ホルクハイマーによ

れば、「限定された否定の概念」こそ、「生」と「知」との間の「止揚」がたい緊張」のうちに踏みとどまりながら、なおも懷疑主義、相對主義に陥ることのない認識のありかたであり、懷疑主義の淵から真理の問題を救い出すことを可能にする概念なのである。ここで目指されているのは、懷疑主義によって危機に晒された理性概念を弁証法的方法によって救い出し、「弁証法的理性」(*ibid.*, S. 311)としての理性の可能性を追求することである。このようにして三〇年代前半に構想された「学際的唯物論」のプログラムは、かろうじてその哲学的な企図を保持しえたのであった。

三 三〇年代後半の批判理論

——市民社会における「主体」と「権力」との絡み合い

「学際的唯物論」の構想は社会研究所の研究計画として実際に遂行され、それは「権威と家族に関する研究」(一九三六年)として結実した。ここで市民的家族の形成と権威との連関について考察を加えたホルクハイマーは、その後、のちの『啓蒙の弁証法』の叙述を想起させるような手法で、市民社会史を「主体形成史」と「権力」形成史との絡み合いとして読み解くことを試みる。それが論文「エゴイズムと解放運動」(一九三六年)である。

ホルクハイマーによれば、初期市民社会の指導者(Führer)たちは、「人民有和」(GS IV, S. 27)の理念を掲げることで大衆の支持を獲得し、自らの支配を確立してゆく。ところが、この理

念が意図するところは、富の再分配による貧者救済を図ることではなく、エゴイズムを原理とする市民社会の熾烈な現実のなかにあらゆる主体を組み込むために、個々の主体に「自己規律・責任・勤勉」(*ibid.*, S. 23)と言った自立的・自律的な生活態度——すなわち禁欲道徳——を要請することであった。それゆえ、指導者の要請を受けた個々人が自己の物質的な欲求を抑圧し、禁欲精神を「内面化」(verinnerlichen) (*ibid.*, S. 40) することによって自立的・自律的な「主体」へと錬成してゆく「規律訓練化」(Disziplinierung) (*ibid.*, S. 41)のプロセスは、エゴイズム＝自己保存を構成原理とする市民社会へあらゆる主体が組み込まれてゆくプロセスにはかならないことになる。こうして浮かび上がってくるのが、「指導者の要請を受けて大衆が禁欲道徳を内面化し、自己を市民的「主体」へと規律訓練することが、市民社会の体系を完成させ、指導者たちの「権力」を支える」という図式である。ホルクハイマーは、自立的・自律的な「主体」の形成プロセスのうちに、主体の「権威主義的性格」(*ibid.*, S. 32)が胚胎していると考えたのである。

しかし、このような視座の獲得によってホルクハイマーは三〇年代前半の「学際的唯物論」の理念を純粹に保持し続けることが困難になる。「学際的唯物論」としての批判理論において理論の主体ならびに名宛人として想定されていたのは、学際的社会研究の示す仮説に関して、その妥当性を合理的な思考に基づきつつ自ら精査しうる理性的な主体であった。このような理性的な主体が想定されなければ、学際的社会研究の成果は「解放」

の挺子とはなりえないからである。ところが、市民社会における自立的・自律的な主体が、「エゴイズム」論文で示されたような權威主義的な大衆でしかないのだとしたら、〈学際的唯物論〉は理論の主体と名宛人を失わざるをえない。こうして、理論の主体と名宛人とをどのような形で想定すればよいのか、大衆社会状況のなかで〈解放〉の可能性をどこにみればよいのか、ということが問題となる。

論文「伝統的理論と批判理論」（一九三七年）は、こうした三〇年代後半の批判理論の隘路を自覚した上で書かれているとみてよい。ここでは、批判理論の主体はたんに仮設的な命題を提示するにとどまらず、歴史的パースペクティヴに立ちつつ現前する社会に関する価値判断を变革に向けて実存論的に下してゆかねばならない、と主張されている。ホルクハイマーによれば、批判理論が定式化する「実存論的判断(Existenzialurteil)」(ibid., S.201)とは、「近代市民社会のシステムは当初は解放的な役割を果たしていたにもかかわらず、その後人類を新たな野蠻へと顛落せしめる機能を果たしている」という判断である(cf. ibid.). 市民社会が「新たな野蠻」へと顛落している事態を主体が矛盾として「意識化」すること、ここにホルクハイマーは大衆社会状況からの脱出の可能性をみるのである。

こうしてホルクハイマーは大衆社会状況のなかで市民的主体にわずかに残された自立性・自律性の残滓に〈解放〉の可能性を託す。だが、大衆社会状況の逼塞をある種の決断主義的なパトスによって突破しようとする性格を持つこのような構想が、

ホルクハイマーの当初の意図とは相容れないことは明らかである。〈学際的唯物論〉以上に規範的次元を強調しようとする三〇年代後半の批判理論は、大衆社会状況のなかでなおも当初の哲学的な企図をなんとか保持しようとした結果たどりついた、ぎりぎりの選択肢であったといつてよいだろうが、その試みはきわめて矛盾にみちたものであったといえる。

四 「啓蒙の救出」をめぐる

——道義的理性の克服可能性への問い

しかし、權威主義的性格が自立的・自律的な〈主体〉の機制それ自身のうちに胚胎しているという視座は、主体の〈実存論的判断〉に期待をかけようとする選択肢をも無効にしてしまわずである。こうして四〇年代初頭には、かつて批判理論の最終的な根拠としていた理性概念そのものが批判の俎上に載せられるようになる。論文「理性の終焉」（一九四二年）では、いまや理性はもっぱら有用性の観点から主体の自己保存にのみ奉仕する道義的理性へと還元されている、という判断が示されている(cf. GS-V, S.320ff.).

ここにおいて、〈弁証法的理性〉としての理性の可能性を救い出そうとする三〇年代前半以来のホルクハイマーの基本姿勢は、もはや放棄されてしまったかにみえる。しかし、ヨーロッパ文明が「新たな野蠻」に顛落しているとされながらも、理性の可能性を問うてゆく姿勢はなお保持されているとみるべきである。一九四六年にアドルノとの間で行われた討議(GS-III, S.593ff.)

においてホルクハイマーは、「われわれのテーマは啓蒙の救出 (Retung der Aufklärung) である」(ibid., S. 594) とする。それは換言すれば「思惟 (Denken) を救出すること」(ibid.) でもある。つまり啓蒙の過程を新たな野蛮に顛落せしめたのは思惟の働きであることはたしかであるにせよ、啓蒙の神話への逆転は、啓蒙がこの思惟を放棄し思惟の働きを硬化させてしまったことによってもたらされたのであって、むしろ硬化した思惟を救出し「思惟を思惟自身へともたらしこと」(ibid.)こそ課題なのである。このことは「思惟が己れの内容の無意味さを省察することによってしか果たされない」(ibid.)。思惟における反省の契機をすくい上げることによって啓蒙の救出を図ること、これがホルクハイマーの意図である。

一方アドルノは、思惟が自らの無意味さを反省したとしてもそれをなんらかの形で言明しようと試みる立場のうちに「全体性の意味付与を救出しようとする試み」(ibid., S. 605) を見て取り、ホルクハイマーの「啓蒙の救出」の方法論に抵抗感を示している。このアドルノの抵抗感が射たものであるとすれば、ホルクハイマーの「啓蒙の救出」への志向の根底にはある種の「全体性」への希求が密かに横たわっていたといえよう(このことは、「完全な共著」と自称される「啓蒙の弁証法」において両者の思考系が微妙に交錯していることをも示唆している)。その意味でホルクハイマーにおける「啓蒙の救出」の目論見は、「限定された否定」に定位しながら「弁証法的理性」としての理性の可能性を追求しようとしていた三〇年代の立場の延長上にあるとみる

ことができる。

もちろん、このような志向は啓蒙への仮借なき批判と簡単に相容れない。ホルクハイマーは、この二つのベクトルの間で引き裂かれるアポリアのうちに自ら意識的に身を沈めていたといつてよい。このようなスタティックな姿勢は、「実存論的判断」としての批判理論の構成のうちにみられる一種の決断主義的な姿勢とは一見相反するようにみえる。しかし、こうした姿勢の根底には、変革の断念ではなく、むしろ変革の特権的な瞬間への期待が潜んでいるとみるべきである。その意味でここでも「主体」の自立性・自律性の残滓への期待は保持されている。ホルクハイマーの思想は、三〇年代から四〇年代にかけて大きな変貌を遂げながらも、「全体性」を希求する主体の反省の力に期待をかける姿勢については終始一貫して保持されていたといつてよい。たしかにこのことはハーバーマスのいうようにホルクハイマーが意識哲学の枠組みにいたことを意味しているといえるかもしれない。しかしそれが意識哲学的陥穽であるかどうかは、また改めて検討しなければならない問題だろう。

上野成利氏の報告にたいする質疑応答

上野成利会員の報告に対して、まず細見会員から、「全体性」概念に対する態度で、アドルノとホルクハイマーの差異を浮き彫りにしようというのが、報告の狙いの一つであったと思うが、その場合もう少し「全体性」概念を、細かく分節して考える必要があるのではないか。アドルノの場合には、システムとして

既成のものとなっている全体性が考えられているが、ホルクハイマーの場合はどうか、といった質問がなされ、これに対して報告者から、単純化して言えばアドルノにとって「全体」とはあくまで否定的なものとして捉えられているが、ホルクハイマーはむしろ肯定的に捉えており、あくまで具体的な経験に定位した、(部分認識に自足しない)全体性の認識をめざしているのではないか、といった回答がなされた。

また別の会員からは、ホルクハイマーにとつてのショーペンハウエルの影響如何について質問があり、たんに若い頃受けた影響が晩年のペシムスティックな神学の中に再登場してくるというだけではなく、三〇年代以降『啓蒙の弁証法』へ向かう中で意識的に沈潜していったアポリアの延長上に、後期のペシムスティックな神学的立場が成立すると考えられる旨回答があった。

また司会者からは、ホルクハイマーが批判的理論の道具立てとして使っている *«existentiales Urteil»* とは、伝統的理論の仮言判断の体系に対して、現実の存在についての判断だということ強調しているのだから、それを実存論的判断と訳し、そこから実存主義との親和性を導き出すのは問題ではないかとの疑問が提出されたが、これに対して報告者からは、ことばの問題としては改めて考えたいが、全体の流れの中で、とくに三六年のエゴイズム論文から三七年論文の流れの中では、報告中のような解釈も可能ではないか、という旨の回答があった。